

〔実践報告〕

学士課程看護基礎教育のカリキュラム改革

— 3年に及ぶ取り組み経過とその成果・課題 —

宮崎美砂子¹ 山本 利江²

Reform of nursing education curriculum in bachelor course: The approach process lasting for three years, and the result and problem

Misako MIYAZAKI¹, Toshie YAMAMOTO²

要 旨

本学部では平成17年度より新カリキュラムによる教育を開始したところである。カリキュラム改革にあたっては3年の検討期間を要した。その経過と成果・課題について報告する。本改革は、委員会や教員懇談会での討議、各教育分野へのヒアリングや調査等、多様な方法を用い、学部内教員一人ひとりが参画する形態で進められた。その過程は①改革を必要とする根拠の明示、カリキュラム策定の合意形成方法の確立、教育理念・目標・到達目標（案）提示、②カリキュラム構成（カリキュラム軸・要素）確定、科目内容原案提示、③複数分野共同運営科目等の看護実践力強化科目の確定、統合カリキュラムとしての質の担保、卒業要件確定、教育科目・時間割（案）作成、の段階を経ながら進んだ。

本改革を通して、分野を超えて多くの議論を重ね、共同作業を行ったことにより、教育組織としての機能強化が図られた。また合わせて複数分野共同運営科目という新たな形態の授業を採択したことは、学士課程看護基礎教育としてより本質的で普遍性の高い教育内容を志向する教育組織へと本学部が次なる段階に踏み出したことを示唆するものと考えられる。

Key Words：看護基礎教育、カリキュラム改革、学士課程

I はじめに

本学部では平成14年5月から平成16年3月にかけて学士課程の看護実践力育成強化に向けたカリキュラム改革に取り組んだ。約3年間を要したが、教育研究分野を超えて改革の必要性の認識を深め、改革の方向性と内容に合意し、新カリキュラムを構築するに至った。

このたびのカリキュラム改革の要点は、(1)看護実践力の育成強化、(2)専門基礎科目と専門科目の連動の担保、(3)在宅及び在宅の移行に伴う看護知識・技術の充実、(4)複数分野共同運営による教育内容の充実、(5)履修時間のスリム化と自己学習の強化、(6)卒業時までの到達目標の設定、に集約される。教育理念を具現化するための教育目標の構成要素には、「ジェネラリスト」、「倫理的感受性」、

「創造力や開拓精神」、「他職種ならびに市民との協働」、「国際的視野」、「自己学習」を置いた。新カリキュラムの卒業要件は普遍教育28単位、専門教育科目96単位の合計124単位とし旧カリキュラムよりも3単位減少させた。ミニマム・エッセンシャルズを教授するための効果的かつ効率的な教育内容を実現するため、教育方法に様々な改革を行った。特徴的なものを列挙すると、看護基本技術を体系化し複数分野共同運営による技術教育の開始、現代社会において強化すべき内容として看護倫理、健康教育、マネジメント科目の新設、実習を効果的かつ効率的に編成するため、基礎実習の段階に、臨床に加えて在宅の場の導入、コア概念を導入した各看護領域の実習プログラム導入、チームアプローチや複雑な状況下で対応できる実践力強化のための統合実習を設置した。また4年間の学習を統合するツールとしてポートフォリオの導入と統合学習を支援する科目の設置、研究による実践変革力育成科目等の設置である。とくに

1 千葉大学看護学部地域看護学教育研究分野

2 千葉大学看護学部基礎看護学教育研究分野

複数分野共同運営による専門教育科目（必修）は、専門基礎科目2科目、専門科目14科目あり、必修科目全55科目のうち29.1%を占めている。

Ⅱ カリキュラム改革の取り組み経過

平成14年3月「大学における看護学実践能力の育成の充実に向けて（文部科学省看護学教育の在り方に関する検討会報告）」の公表を受けて、本学では平成14年5月に早くも教員懇談会を開催し報告書に対する意見交換を行ったが、その時点では、教員の多くはカリキュラム改革の必要性を現実的に受けとめていなかった。しかし直後の平成14年5月の教授会にて学部長からカリキュラム改革が諮問され、取り組みが開始されることになった。これより第1次カリキュラム委員会（平成14年5月から平成15年11月、構成員教授5名）、第2次カリキュラム委員会（平成15年12月から平成16年3月、各分野の助教授・講師12名）、新カリキュラム推進委員会（平成16年4月から平成17年3月、教授・助教授6名）の3つの委員会が引き継ぎながらカリキュラム改革を進めた。開催した会議は、委員会（第1次委員会は月1～2回、第2次委員会は週1回、新推進委員会は月2回）、拡大委員会（11回）、各分野へのヒアリング（8回）、教員懇談会（6回）であり、実施した調査は、現行科目の授業回ごとのキーワード調査（科目責任者対象）、卒業までに担保すべき看護基本技術項目及び到達度レベルについての調査（各分野対象）、普遍教育科目の履修評価（1・2年次学生及び全教員対象）、新カリキュラム原案への意見調査（全教員）であった。取り組みは、①改革を必要とする根拠の明示、カリキュラム改革の合意形成方法の確立、教育理念・目標・到達目標（案）提示、カリキュラム構成（カリキュラム軸・要素）確定、科目内容原案提示、複数分野共同科目等の看護実践力強化科目の確定、統合カリキュラムとしての質の担保、卒業要件確定、教育科目・時間割案作成、の段階を経ながら進んだ。

1. カリキュラム改革に時間を要した背景

1) 改革を必要とする根拠の明示

旧カリキュラム（平成6年度から平成16年度）では、教育に対する各教育研究分野の主体性・責任性が強調され、各分野が概論から実習に至るまでの各担当科目を通して系統的に教授するというカリキュラム構造をもっていた。博士課程開設の時期（平成5年）と相まって、各分野の専門性を通して看護学の基礎を教授する教育方法に価値を置き、またカリキュラム評価（学部学生・教員へ

の調査）結果からもその成果を確認していた。当学部の発展過程のうえで、また看護学の確立という当時の社会要請に応えるという点から考えてみても、旧カリキュラムが果たした役割・意味は大きかった。それ故にカリキュラム改革への取り組みは5年、10年先を見越した意識変革を教員に迫るものであり、改革への合意形成には時間を要した。

会議での討議及び各種調査を通して旧カリキュラムの現代における問題点、すなわち知識・技術の統合（学生の主体性に委ねてよい統合の部分と教育として補完すべき統合の部分とがあるはずという気づき）、教育内容の連動（各分野が担う教育の連動性について確認が不十分なまま教育が進行しているという気づき）、実践能力強化への組織的対応（今まで以上の教育効果を上げるためには、各分野の創意工夫だけでは困難であるという気づき）、カリキュラムの過密性（学生にとって自己学習時間が十分に取れない状況を放置してよいのかという気づき）を認識するに至った。

2) カリキュラム策定方法の確立

教員懇談会での討議や各分野へのヒアリング、各種調査の実施を通して、多くの教員がカリキュラム改革の必要性について認識を深めていった。しかしカリキュラム改革を具現化する教育理念・教育目標・卒業時到達目標および科目構成（案）の協議段階で多くの教員から様々な意見が出され、委員会が原案をつくり協議するという方式で進めていたところを、途中から、原案づくりの段階に教員の誰でもが直接参加できるように拡大委員会の場をつくり、理念や目標に込める意味や表現を吟味し精練させる作業を共同して行えるように変更した。また進捗状況をメール等を用いて積極的に発信するようにし、カリキュラム策定をオープンな体制で進めるようにした。拡大委員会には助手を含む延べ62名の教員の参加があり、講師以上の教員のほとんどから1回以上の参加が得られた。

2. カリキュラム構成の確定と科目原案の提示

週1回という集中的な作業には委員会メンバーの全員参加が困難であったので、途中、作業グループをつくり、グループごとに週末や休日をさいて進めた。カリキュラム構成の確定に至る作業は、看護教育学教育研究分野が採用している統合カリキュラム編成の方法論¹⁾に基づき行った。方法論を手がかりにしつつも暗中模索する日々が続いたが、これまでの委員会活動でカリキュラム改革の土壌はつくられており、学部長からの絶対創るという檄が精神的支柱となった。特筆すべきは

メンバーのグループダイナミックスが健全に働き、メンバー間の相互浸透が進む雰囲気の中で、互いの学問的基盤への尊敬と交流をもち得たことであった。看護学部教員の多くは、従来、分野の縦割りで活動することが多かったが、濃密な時間を共有し、分野を越える教員同志の連帯感が生まれた。こうして、委員会活動は図らずもファカルティデイベロップメントと学部内連携の強化をもたらした。以下に作業経過を示す。

①現行カリキュラムにおける内容の諸要素を導き出す

授業回ごとのキーワード調査で得られた4,020個のキーワードを、帰納的に整理して現行カリキュラムの内容の諸要素を明らかにし、授業内容の重複の適否を確認した。

②「人間」「健康」「環境」「看護」の用語解と、新カリキュラムにおける内容の諸要素から成る理論的枠組みを作成する

教育理念・教育目標・到達目標（案）と、上記

①で得られた現行カリキュラムの内容の諸要素を照合した。「教育課程とは学生達が、学校の教育目的に即して望ましい成長発達（変化）を遂げるために必要な諸経験を彼らに提供する意図的、組織的な教育内容の全体計画である」²⁾という定義への合意を確認し、新カリキュラムに託す内容として一致できる表現を検討した。

③カリキュラム軸の骨格を作成する

教育内容の組織化のため、到達目標をゴールに据えて学士課程4年間を俯瞰し、どの学年でも共通する水平軸と、学年進行で積み重ねる垂直軸という視点を定めた。時間枠内での運用を具体的にするため、基礎、専門基礎、専門科目の基盤、専門科目の発展というⅠ～Ⅳのレベルを設定した。図1にカリキュラム軸の内容を示す。

④学生のレベル目標を書き込む

教育目標と到達目標から卒業生が具える特性を導き出し、その特性が強調される垂直軸と水平軸の交わる場所の各レベルで、達成する目標をレベル目標として言語化し、レベル目標と学科目標に流れる理論的根拠を明らかにした。

⑤レベル目標ごとにそれを達成するための科目原案を提示する

旧カリキュラム科目と、これまでに科目案について検討した資料を照合し、レベル目標を達成するための科目を特定した。教育目標・到達目標・強調されるカリキュラム軸・レベル目標・科目名で構成された表を作った。その内容を表1に示す。

⑥科目ごとに科目目標を書き入れた科目内容原案

を作成する

科目ごとに、理論的枠組みに基づくカリキュラム軸で定められたレベル目標を、その科目に相応する科目目標へと具体化・焦点化した。各分野で担当可能かどうかを検討し、シラバス原案へとつながるよう、科目目標を書き入れた科目内容原案を作成した。

3. 看護実践力修得の強化科目の確定

複数分野共同科目、看護基本技術修得科目、社会情勢への対応科目、本学部としての特徴を出す科目の各観点から、上記の科目内容原案について更なる検討を行った。特に看護基本技術については、「大学における看護実践能力の育成の充実に向けて」「看護実践能力育成の充実に向けた大学卒業時の到達目標」（いずれも文部科学省看護学教育の在り方に関する検討会報告）を参考に、看護基本技術として卒業時まで担保すべき技術項目とその到達度について、教員に意見調査を実施し、4つに技術を体系化し科目立て、看護基本技術項目の到達レベルを検討した。この検討は後に看護実践能力自己評価のためのポートフォリオを作成していくときの基礎資料となった。

4. 卒業要件における総単位数・科目内容の検討

各科目内容原案について、教育目標との関連、科目名、授業形態、単位数、カリキュラム軸と関連づけたときの内容の諸要素、科目担当者の各観点から、さらにカリキュラム改革の要点としたことが充たされる内容となっているかどうかについて、再検討を行った。複数分野共同運営科目については、共同の形態がオムニバス方式か、授業の計画・運営そのものを共同で実施する方式か、さらに科目責任者を誰とするか、特に実習にかかわる科目については助手をも含め、実質的な協議を繰り返し行った。さらに普遍教育科目として履修する内容・単位数の見直し、保健師・助産師・看護師養成課程基準との照合、卒業要件単位数の見直し、今後4年間の時間割シミュレーション、新旧カリキュラムの照合、編入生履修科目の見直し、履修案内作成を行った。

5. 統合カリキュラムとしての質の担保

看護の対象は個人、家族、集団、地域であることをカリキュラム軸、卒業時の到達目標に明示し、そのことをカリキュラム策定過程で絶えず確認し共有した。また地域を単位とした看護展開技術は、看護基本技術の一つとして科目に位置づけた（看護基本技術Ⅳ（地区活動論））。また助産師関係科目として教授する内容については、可能な限り多くの内容が看護師教育科目との統合が図れるよう

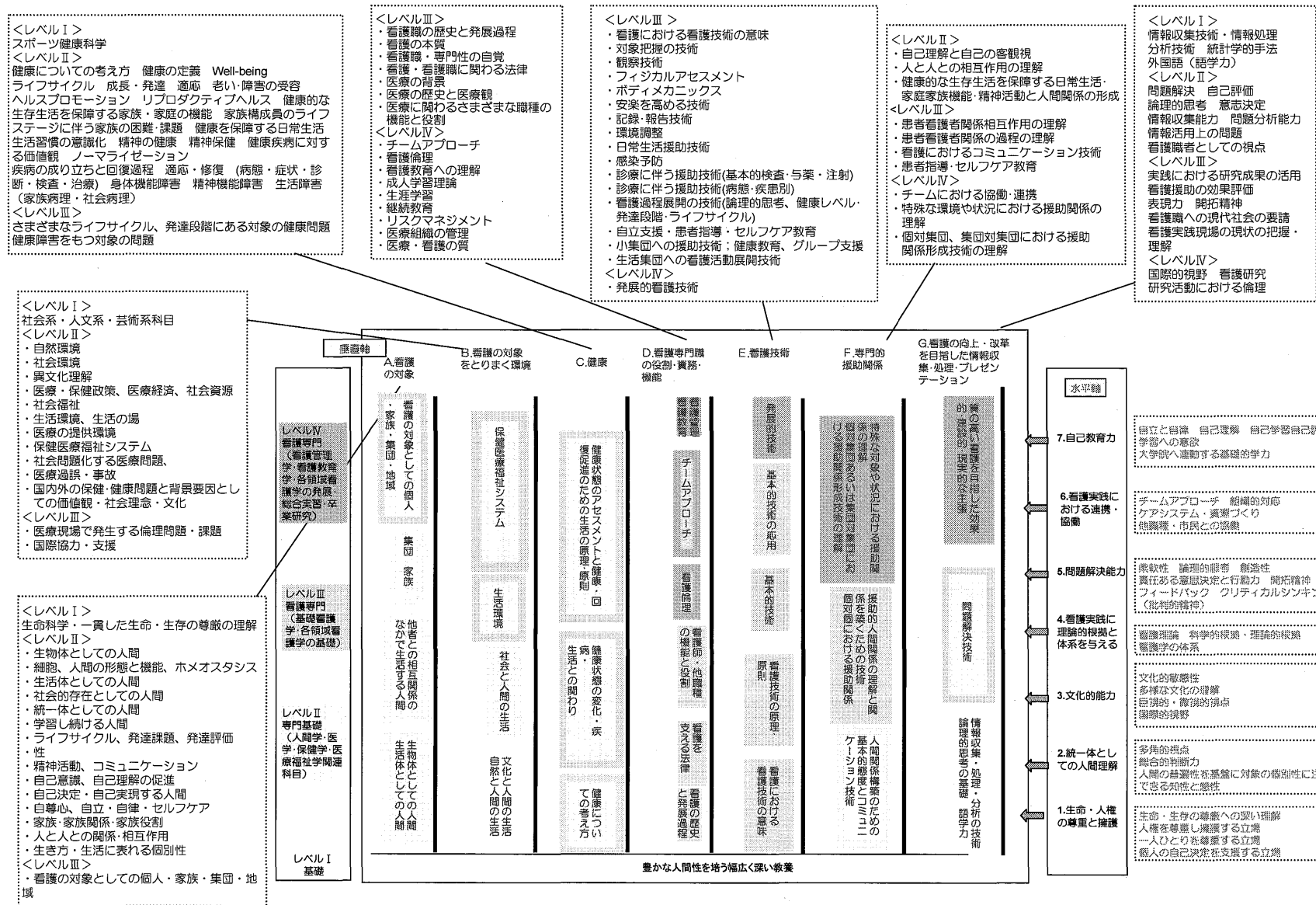


図1 理論的枠組みに基づくカリキュラム軸

表1 レベル目標と科目原案

教育目標および到達目標		強調される カリキュラム軸	レベルⅠ	レベルⅡ	レベルⅢ	レベルⅣ
			普通科目・導入科目	専 門 科 目	専 門 科 目	専 門 科 目
教育目標 1 幅広く深い教養と豊かな人間性を基盤とした総合的な判断力を有するジェネラリストを育成する 〔到達目標〕 対象者とのかわりにおいて、人間についての幅広い専門知識を使って、その人を統一体として理解し、看護に反映できる。また看護基本技術の根拠を理解し、それを応用してあらゆる健康レベルにある人の生活を援助できる。	(到達目標 1-a) 対象者とのかわりにおいて、人間についての幅広い専門知識を使って、その人を統一体として理解し、看護に反映できる。	垂直軸： 看護の対象 看護の対象を取り巻く環境 健康 水平軸： 統一体としての人間理解	人間の生命や生活、および、人間と自然・社会・文化との相互作用に関する基本的な知識を修得する。 (普通科目)	統一体(生物体・生活体)としての人間理解に基づき、人間と自然・社会・文化との相互作用を理解する。 健康についての考え方、および、健康状態の変化と疾病や生活との関わりについて理解する。 (形態機能学ⅠⅡ、形態機能学実習、代謝栄養学、薬理学、病態学ⅠⅡ、病態学実習ⅠⅡ、人間学ⅠⅡ、保健学ⅠⅡ、保健学演習、医療・看護の歴史、保健医療福祉制度論、各健康障害と看護)	様々な健康状態にある人間に関する知識ならびに看護に必要な判断力を培い、実践の場で活用する。 (看護学原論ⅠⅡ、看護基本技術ⅠⅡⅢⅣ、基礎看護実習、看護実践技術評価、訪問看護実習、看護倫理、各看護学概論、各看護方法、健康教育論、各看護コア実習、社会資源と看護マネジメント)	
	(到達目標 1-b) 看護基本技術を応用し、援助の人間関係を通して、様々な健康レベルにある人の生活を援助できる。	垂直軸： 看護技術 専門的援助関係 水平軸： 看護実践に理論的根拠を与える問題解決能力	人間関係に関する基本的な知識について理解する。 (普通科目)	看護基本技術の原理原則の根拠を理解する。看護における援助の人間関係を理解する。 (形態機能学ⅠⅡ、形態機能学実習、代謝栄養学、薬理学、病態学ⅠⅡ、病態学実習ⅠⅡ、人間学ⅠⅡⅢ、保健学ⅠⅡ、保健学演習、保健医療福祉制度論、各健康障害と看護)	看護基本技術ならびに援助の対人技術を生かして、対象の抱える様々な健康上の問題を解決するための看護を理解し実践する。 (看護学原論ⅠⅡ、看護基本技術ⅠⅡⅢⅣ、基礎看護実習、看護実践技術評価、訪問看護実習、各看護学概論、各看護方法、健康教育論、看護コア実習、社会資源とマネジメント)	発展的な看護技術および特殊な状況における援助の人間関係について理解する。 (各看護統合実習)
教育目標 2 倫理的感受性を磨き、倫理観を行動や態度で示すことができる。また常に対象者の立場に立って行動し、それを倫理的な観点から説明できる人材を育成する 〔到達目標〕 生命への畏敬の念をもって、個人、家族、集団、地域の多様な価値を多角的に理解し、対象の立場を尊重する行動や態度をとることができる。	(到達目標 2-a) 生命への畏敬の念をもって、個人、家族、集団、地域の多様な価値を多角的に理解する。	垂直軸： 看護の対象 看護の対象を取り巻く環境 水平軸： 生命・人権の尊重と擁護	生命生存の本質的理解を基盤に、個人、家族、集団、地域の価値の多様性について理解する。 (形態機能学ⅠⅡ、形態機能学実習、代謝栄養学、病態学ⅠⅡ、病態学実習ⅠⅡ、保健医療福祉制度論)	生命倫理および実践現場における看護倫理の基本を理解し、自己の倫理観を点検する。実践現場において倫理的葛藤が生ずる状況を理解し、その状況における倫理的意思決定プロセスを理解する。 (看護倫理)		
	(到達目標 2-b) 対象者の立場を尊重する行動や態度をとることができる。	垂直軸： 専門的援助関係 水平軸： 生命・人権の尊重と擁護	自己と他者の考え方や感じ方に違いがあることを理解する。 (普通科目、看護学セミナー入門)	考え方や感じ方の異なる他者と人間関係を構築する方法を理解する。 (人間学Ⅲ)	対象者の尊厳と権利の会得(感得)に基づき、対象者の自己決定を支援し、対象者を擁護する行動や態度を理解し、実践する。 集団・地域の多様な価値観を尊重し、その価値観を支援する行動や態度を理解し、実践する。 (看護学原論ⅠⅡ、各看護学概論、各看護方法、看護倫理、健康教育論、看護実践技術評価、基礎看護実習、訪問看護実習、各看護コア実習、各看護統合実習)	
教育目標 3 創造力や開拓精神を発揮し、より良い看護の実現に向けて、努力できる人材を育成する 〔到達目標〕 生じている現象に深い関心を寄せ、問題解決のために必要な知識・資源を獲得し、柔軟な思考力を発揮して積極的に問題解決に向けて取り組むことができる。		垂直軸： 看護専門職の役割・責務・機能 看護を向上・改革するための情報収集・処理・プレゼンテーション 水平軸： 問題解決能力	語学力を活用し、学際的な視野を養う。 (普通：既修・未修外国語科目) コンピュータネットワークを利用する基本的技術について理解する。 (普通：情報処理科目) 文献検索方法について理解する。 (看護学セミナー入門)	保健医療情報に関する基本的知識及び情報処理技術について理解する。疫学の原理と方法について理解する。 (保健学Ⅱ、保健学演習、保健情報学)	看護の質向上に対する看護職者の責務について理解し、問題解決に必要な知識・資源を獲得しながら問題に取り組む。 看護研究の必要性と意義を理解し、実践するための基礎的知識を修得する。看護実践の問題解決のために研究成果を活用する。 (看護学原論ⅠⅡ、看護教育学、訪問看護実習、各看護コア実習、看護実践と研究Ⅰ)	看護職への現代社会の要請及び看護実践現場の現状について理解し、問題解決に向けた自分の意見を効果的に主張する。研究の実施を通して、看護実践と看護研究の関係について理解を深め、看護実践における課題を研究的に分析・解決し、成果を発信する方法を学ぶ。看護上の問題を解決するための管理的戦略や資源を理解する。 (各看護統合実習、看護管理学概論、看護実践と研究Ⅱ)
				「批判的思考」「柔軟で論理的な発想」「開拓精神」「創造性」「責任ある意思決定と行動」はすべての科目の中で取り入れる。		
教育目標 4 看護専門職者としての責任感を持ち、他職種ならびに市民と協働できる人材を育成する 〔到達目標〕 保健医療チームにおいて、看護専門職者としての自己の責任を自覚し、他職種ならびに市民との協働において、看護専門職者の機能を効果的に発揮し、協働活動に参加できる。		垂直軸： 看護専門職の役割・責務・機能 水平軸： 看護実践における連携・協働	看護が機能する多様な場および役割を理解する。 (看護学セミナー入門)	医療の歴史と看護の発展過程を概観し、現代社会における人々の健康と生活を守る保健医療福祉システムを理解する。 (医療・看護の歴史、保健医療福祉制度論)	保健医療福祉システムにおいて看護職及び他職種の役割・責務・機能を理解し、看護職者間、および他職種や市民との連携・協働の意義・必要性を理解する。 (看護学原論ⅠⅡ、基礎看護実習、訪問看護実習、各看護学概論、各看護方法、各看護コア実習、社会資源と看護マネジメント、看護管理学概論)	チームアプローチにおける看護職者としての自己の役割・責任を理解し、看護職者間ならびに他職種や市民との連携・協働の方法を理解する。 (各看護統合実習)
教育目標 5 国際的視野に基づく看護を展開できる人材を育成する 〔到達目標〕 文化の多様性の理解にもとづき、国際的拡がりをもって、看護活動の必要性および看護方法を理解できる。		垂直軸： 看護専門職の役割・責務・機能 水平軸： 文化的能力	語学力およびコミュニケーション能力を高める。 (普通：既修・未修外国語科目)	多様な文化における価値観の違いとその背景を理解する。 (人間学Ⅱ)	多様な文化の中で生じる様々な健康問題について理解し、文化を反映した看護活動の必要性および看護方法を理解する。 (各看護学概論、(自)異文化看護演習)	現在行われている国際的な看護活動および世界各地の看護について理解を深める。 (「自」世界各国専門看護制度、(自)看護国際協力論)
教育目標 6 人類の福祉に貢献することに価値を感じ、生涯にわたり自己学習・自己評価し続けることのできる人材を育成する 〔到達目標〕 適切な自己評価に基づき看護職者として必要な学習課題や目標を自ら設定し、適切な学習方法を選択・活用して、絶えず課題の克服と目標達成に取り組み、その成果を評価することができる。		垂直軸： 看護専門職の役割・責務・機能 水平軸： 自己教育力	大学生としての自己の課題を明確化する。 (看護学セミナー入門)	学習するとはどういうことかを理論的に理解する。 (看護教育学)	看護実践及びさまざまな看護職者との交流を通して、看護職を目指す自己への客観的な理解を深め、自己の到達レベルを評価し、自己の課題及びその課題に取り組む方法を明らかにする。 (看護教育学、看護実践技術評価、訪問看護実習、各看護コア実習)	看護職者として成長するための自己の課題に主体的に取り組み、その成果を評価する。 (各看護統合実習、看護学セミナー統合)

*表中の()は科目名を示す
*(自)は、自由科目を示す

に、それぞれの内容を検討した。

Ⅲ カリキュラム改革への取り組みの成果と課題

1. 取り組み過程がもたらした成果

改革には3年に及ぶ時間を要したが、全教員が何らかの形で直接作業に関与した。これによりカリキュラム改革に対する教員の問題意識と責任が組織全体に広がる経験となった。教育理念や教育目標・到達目標の作成過程に多くの教員が直接かわり、一つひとつの言葉の意味を吟味し議論を重ね、精選した言葉から成る文章を生み出した。その様な作業を共同して実施したからこそ、言葉に込められた意味や価値を共有できたのだといえる。また分野を超えて教員が本学の卒業生像、卒業時の到達目標、それらを具現化する教育内容について議論を重ねた。それらの経験により教育組織としての機能強化を図ることができたのではないかと考える。また、複数分野共同運営科目という新たな授業形態は、第1次カリキュラム委員会が当初提示したときには実現不可能とする意見が多く出されたが、3年間の協議を経るなかで、教育改革に必要な方法として挑戦しようとする意識が組織的に醸成され、共同を前提にした話し合いが成されるようになった。このことは各分野の枠組みを超え、学士課程看護基礎教育としてより本質的で普遍性の高い教育内容を志向する教育組織へと次なる段階に本学部が踏み出したことを示唆するものと考ええる。

2. 取り組み過程における課題

カリキュラム改革に時間を要した理由の1つには、カリキュラム改革の必要性を教員が実感できる根拠(資料)が必要であったためである。授業

回ごとのキーワード調査等が役だったことから、教員がそれぞれの立場からカリキュラム改革を現実的に考えられる資料提示が重要といえる。またもう1つには、カリキュラム改革の方法や手続きを組織内で合意していくのに最も適した方法を見出す必要があった。カリキュラム改革に対して教員がどのように関与したいと考えているかを確実に把握しながら、組織にあった方法でカリキュラム改革の作業を進めることが重要である。

平成17年4月から新カリキュラムが開始され、各科目の実際的な進め方についての検討が各科目担当者により進められているところである。新カリキュラムの評価方法についてもカリキュラム委員会の段階では十分な検討ができなかったが、教務委員会に委ねることとしている。

最後にカリキュラム改革に携わった委員会メンバーを以下に記し、一連の作業に対する感謝の意を表したい。第1次カリキュラム委員会メンバー：石垣和子、舟島なをみ、正木治恵、宮崎美砂子(委員長)、森恵美(50音順、以下同)、第2次カリキュラム委員会メンバー：荒木暁子、上野まり、牛尾裕子、大月恵理子、岡田忍、緒方泰子、荻野雅、佐藤まゆみ、清水安子、田中裕二、野本百合子、山本利江(委員長)、新カリキュラム推進委員会メンバー：岩崎弥生、佐藤まゆみ、宮崎美砂子(委員長)、森恵美、山田重行、山本利江。

引用文献

- 1) 杉森みど里：看護教育学，第3版，77-144，医学書院，2000.
- 2) 前掲書p 82